（2）人と海との関わりが息づく歴史文化

海に面する舞鶴は、海と深い関わりをもって、古代から発展し、日本海と瀬戸内海をつなぐ由良川から加古川への道を含め、水上交通により外の世界とつながっていた。縄文時代に日本海へ漕ぎ出した浦入遺跡の丸木舟、弥生時代の船着場のある志高遺跡などは古代からの海から発展した交流を伝える貴重な歴史文化遺産になっている。また、78基からなる朝来の大波・奥原古墳群は、古墳時代末期の貴重な歴史文化遺産である。

また、舞鶴の代表的な祭りには海との関わりを伝えるものもある。現在も吉原や成生などの特徴的な漁村集落のたたずまいや、集落で営まれ続ける祭礼行事の雄島まいりや伝統行事の吉原の万灯籠、小橋の精霊船行事などの祭礼につながっている。

古代に都に貢納した「カワハギ」をはじめ、江戸時代に将軍に献上した「丹後ぶり」などの海の恵みである魚介類やかまぼこ生産は、古代から現代へと続く人々の暮しが豊かな海の恵みを余すことなく活かしていることを示している。

さらに、舞鶴の多くの地域では、祭りや行事でばら寿司やかまぼこが食されるなど、食文化の面でも海との関わりを継承している。

このように、舞鶴では、海との関わりが現代も息づいている。

ストーリーを構成する主な歴史文化遺産			
浦入遺跡	吉原の景観	吉原の万灯籠	舞鶴かまぼこ
志高遺跡	成生の景観	小橋の精霊船行事	カワハギ
桑飼下遺跡	田井の景観	雄島まいり	丹後ぶり
千歳下遺跡	舟屋	神崎の扇踊り	舞鶴かに
大波・奥原古墳群		安寿と厨子王伝承	ばら寿司
白杉古墳		八百比丘尼伝承	へしこ
田井古墳・ニイザ古墳			
湊十二社奉納和船			
老人嶋神社			
梅田家住宅			

ものがたり２：人と海との関わりが息づく歴史文化

○海とともに育まれた歴史

日本海に面した穏やかな舞鶴湾は絶好の港であり、古より、漁や塩つくりなど、海を生活の場とする人びとによって開かれていった。

アンジャ島で発見された乳棒状蛤刃石斧は、縄文時代に丸木舟が製作されていたことを示し、浦入遺跡で発見された、わが国最古の丸木舟は、その大きさや出土状況から5300年前に外洋に漕ぎ出したことを示している。桑飼下遺跡からも海に関わる品が出土しており、長い年月をかけて、高度な海洋文化が築かれていたと考えられる。

さらに舞鶴の海洋文化は発展していき、日本海と瀬戸内海をつなぐ由良川などの水上交通と、天然の良港を日本海沿岸の交易拠点のひとつとして、国内をはじめ、大陸との交流が活発におこなわれた。

浦入遺跡から発見された、隠岐の黒曜石や北陸産の土器などは、国内での交流を示しており、千歳下遺跡から発見された破鏡や鋳造の鉄斧は、大陸との交流を示すと同時に大和盆地の勢力が朝鮮半島と関係を保つための窓口として重要視したことの裏付けともいえよう。

６世紀後半から７世紀前半につくられた三浜丸山古墳群、田井古墳、白杉古墳などもまた、海と関わりのある一族が集落を形成したことを示している。

戦国時代になると、島や沿岸にも城が築かれるようになり、水軍に関わる地名が残っていることから、これらは、水軍の城だと推察されている。

戦国末期に入ると、田辺城の築城や城下町の形成により、海上交通はさらに重視された。

江戸中期頃、舞鶴は北前船の寄港地となり、日本海交易によって多くの富を築いた。高野川沿いに倉庫群が立ち並ぶ風景は、今も往時の雰囲気を伝えている。また、城下の漁師町として発展した吉原は、江戸時代の町割りと情緒ある町並みを残している。

成生岬付近の漁村、成生・田井には、海に面して舟屋が建ち並んでおり、生活の息吹を感じるたたずまいとなっている。また、成生・田井の森林は、魚つき保安林として漁師が大切に守っており、樹々と海が織り成す景観は、自然の豊かさを表す舞鶴市の特徴的な景観となっている。

○信仰と祭礼芸能・伝統行事

生活の糧を恵む海。海とともに生きていくなかで、様々な信仰や伝統行事を生みだした。

千歳下遺跡は、鏡や玉の他にも大量の鉄を使い、航海の安全を祈った海辺の祭祀遺跡である。

若狭湾に浮かぶ冠島は、古より神の島として漁民のあつい信仰を集める。今でも、海の安全と豊漁を祈願する雄島まいりがおこなわれ、大漁旗をなびかせた漁船が疾走し、太鼓と笛で祭囃子を奏でながら老人嶋神社にむかう姿は迫力があって雄々しい。

毎年10月、湊十二社に奉納される神崎の扇踊りは、危険をともなう舟運を生業としてきたこの土地ならではの祭りである。太鼓に合わせて扇がひらめく舞は、周りの空気を華やかにするものであり、風流踊の特徴が伝承されている。

また、盆行事として毎年８月15日、祖先の霊を海へ送る小橋の精霊船のほか、各地で精霊船行事が継承され、現在も厳かな気持ちで祈りが捧げられている。16日には、300年の歴史を誇る吉原の万灯籠がおこなわれる。海神様の怒りを静め、海上安全と大漁、魚の鎮魂を祈願する勇壮な火祭りは、水面に炎が映り込み、幻想的な情景をつくりだしている。

今でも舞鶴市内の各地で多くの祭礼芸能・伝統行事が脈々と受け継がれている。これは、海と海がもたらす恵みに対する深い敬意や感謝の心の表れといえよう。

○海に関わる食文化

舞鶴は昔から新鮮な海の幸の宝庫であり、大きな恩恵を受けてきた。

藤原京の時代には、カワハギの干物が都に貢納され、江戸時代には、「丹後ぶり」が御用鰤や献上鰤として将軍家に献上されており、都の食文化や時の権力者の食を満たしてきた。

塩づくりが盛んな時期もあり、浦入遺跡からは、製塩土器を支える脚が発見され、製塩技術の進歩がみられる。

また、海の恵みは、舞鶴伝統の食文化を生み、育んできた。

へしこは、吉原を中心に生産され、酒の肴やおかずとして、市内外からも親しまれている。

甘辛く煮つけたサバのおぼろを散らす、独特のばら寿司は、祭りの日などのハレの日や、特別な日に食されてきた。今もなお、地域や家々に伝わる家庭の味が伝承されている。

○人と海との関わりが息づく歴史文化

このような舞鶴の歩みは、海を介し接する新しい文物や交流によって文化を育み、海から陸へ、そして陸から海へと広がりながら混ざり合うことで文化が形成された。今もなお、その歩みは続いている。

表３－２　主な歴史文化遺産の概要（人と海との関わりが息づく歴史文化）

浦入遺跡	浦入遺跡は舞鶴湾口の東側に位置する。日本最大級・最古級の丸木舟や漁労具など、縄文時代からの海辺の人々の暮らしを伝える貴重な資料が出土している。また、隠岐で産出された黒曜石、北陸方面から入手した琥珀玉などは、舟を利用して交易が行われていたことを示している。
志高遺跡	由良川の自然堤防の上に立地する縄文時代から江戸時代にわたる大規模な複合遺跡で、弥生時代中期の住居跡や貼石墓や方形周溝墓群が検出されるなど、京都府北部を代表する遺跡である。
桑飼下遺跡	由良川右岸の自然堤防上に営まれた集落遺跡である。特に縄文時代後期から晩期の集落跡からは、サバ科やアジ科などの海の魚の骨をはじめ、海と関わる出土品が確認されている。
千歳下遺跡	舞鶴湾岸から東約100mにある古墳時代から平安時代の複合遺跡。５世後半の鉄製品、鉄片など祭祀関連遺物が多数出土した。古墳の副葬品以外に鉄製品が出土した例は全国的に珍しい。
田井古墳	八幡神社の裏山の丘陵地に立地する。墳形は円墳で、径20m、高さは下方斜面から6mを測る。耕地の乏しい地域にかなり大型の古墳が築かれており、漁労社会との関係が深い墳墓と考えられる。
老人嶋神社	若狭湾の冠島に鎮座する神社。若狭湾沿岸の漁民の崇敬が篤く、とくに野原・小橋・三浜３区の氏神として祀られてきた。祭神は天火明命・日子郎女命とされる。
梅田家住宅	日本海から吹き寄せられた砂がつくった砂丘の馬背状の部分が三浜集落内の東西をつなぐ道となっている。40年程前の写真をみるとほとんどの建物は茅葺で、入母屋造りの妻を浜にむけている。このような伝統的な茅葺・入母屋造りの住宅は、現在では梅田家と鉄板を被った住宅が１棟、海蔵寺の３棟しか残っていない。
吉原の景観	伊佐津川尻右岸に立地し、城下の漁師町として、領内自由操業の特権を有し栄えた。昭和期に入ると、漁業関連施設の建築により、京都府下最大の漁港となった。現在は水産加工もおこなわれている。吉原は今でも江戸中期に移転されたままの町割りを残しており、水路に面した舟屋など漁師町特有の家屋が立ち並んでいる。
成生の景観	大浦半島の最先端東側に位置する。若狭湾に面した漁業を中心とする海岸集落である。鰤漁が盛んであった明治末から大正年間にかけて建てられた２階建ての主屋や付属屋が、大小２つの緩やかな傾斜地に建つ。また、海沿いには連棟式を含む舟屋がつくられて、集落景観を形成している。
吉原の万灯籠	この行事は盆の火祭りで、毎年8月16日の夜におこなわれる。伊佐津川河口で、マンドロと呼ばれる魚形を思わせる巨大な竹の組み物に、愛宕権現（圓隆寺）から受けた神火をつけ、回転させるもので、火の粉が舞い立ち、川面に映る様は勇壮で美しい。
小橋の精霊船行事	この精霊船行事は、小橋の子供組が中心となっておこなう盆行事である。8月13日に船作り、14日に飾り付け、15日に子ども達が家々のカドに設けられたショウライダナを片付け、供物を集め、施餓鬼のハタや供物と一緒に船に乗せ、はるか沖まで曳航して海に流す。行事のなかで、浜での塩焼きや、子どもが主体であることなど、他にはみられない。
雄島まいり	老人島神社の祭祀権を共有する大浦半島の野原、小橋および三浜の各漁港から出た漁船が大漁旗をなびかせ、笛と太鼓で祭囃子を奏でながら賑やかに雄島にむかい、上陸後、赤い幟を老人嶋神社の社殿に立て、豊漁と海上安全の祈願祭を古式豊かにおこなう。
神崎の扇踊り	湊十二社の祭礼に奉納される。本祭の行事は昼過ぎの宮入で始まる。「お庭入り」「練込太鼓」「東西口上」のあとに「扇踊」が奉納される。東西屋の口上から、この踊りが丹後に広く流布した笹ばやしの一節であることがわかる。
八百比丘尼伝承	八百比丘尼は、娘のときに不老不死の薬といわれる人魚の肉を食べ800歳の長寿を保ったとされ、全国を旅したという伝説が各地に残る。八百比丘尼伝承は、特に北陸を中心とした日本海側に残ることから、日本海側各地の交流を示す伝承のひとつ。舞鶴では、鹿原に庵を結び住んだとされ、八百比丘尼が植えたと伝わる「逆さ杉」が今も残る。また、浮島にも八百比丘尼の織った祭礼幕があったと伝わる。
舞鶴かまぼこ	平成18年（2006）に特許庁の地域団体商標を取得して「舞鶴かまぼこ」と呼ばれている。舞鶴かまぼこ協同組合の研究室で高度な検査に合格した良質な原料のみを使用しており、近海でとれた鮮魚の生すり身を4割以上使用し、舞鶴独自の2段階蒸し上げ方法を採用している。 [出典：京都府HP]
ばら寿司	まつぶたと呼ばれる浅い木箱にすし飯を敷き、その上に甘辛く煮付けたサバのおぼろ、錦糸玉子、紅しょうが、かまぼこ、椎茸などを彩りよく散らし、ハレの日のごちそうとして食されてきた、丹後の郷土料理。 [出典：ばらずしで丹後をつなぐ会HP]
へしこ	さかなのぬか漬けのこと。舞鶴では昔から一般の家庭で作られていた。現在では、舞鶴の吉原地域の代表的水産加工品であり、さばが一番脂ののった秋につくられる。 [出典：舞鶴水産流通協同組合HP]

浦入遺跡から出土した丸木舟

吉原の景観

成生の景観・連棟形式の舟屋

吉原の万灯籠

小橋の精霊船行事

雄島まいり

神崎の扇踊り

舞鶴かまぼこ

図 3－10　主な歴史文化遺産（人と海との関わりが息づく歴史文化）

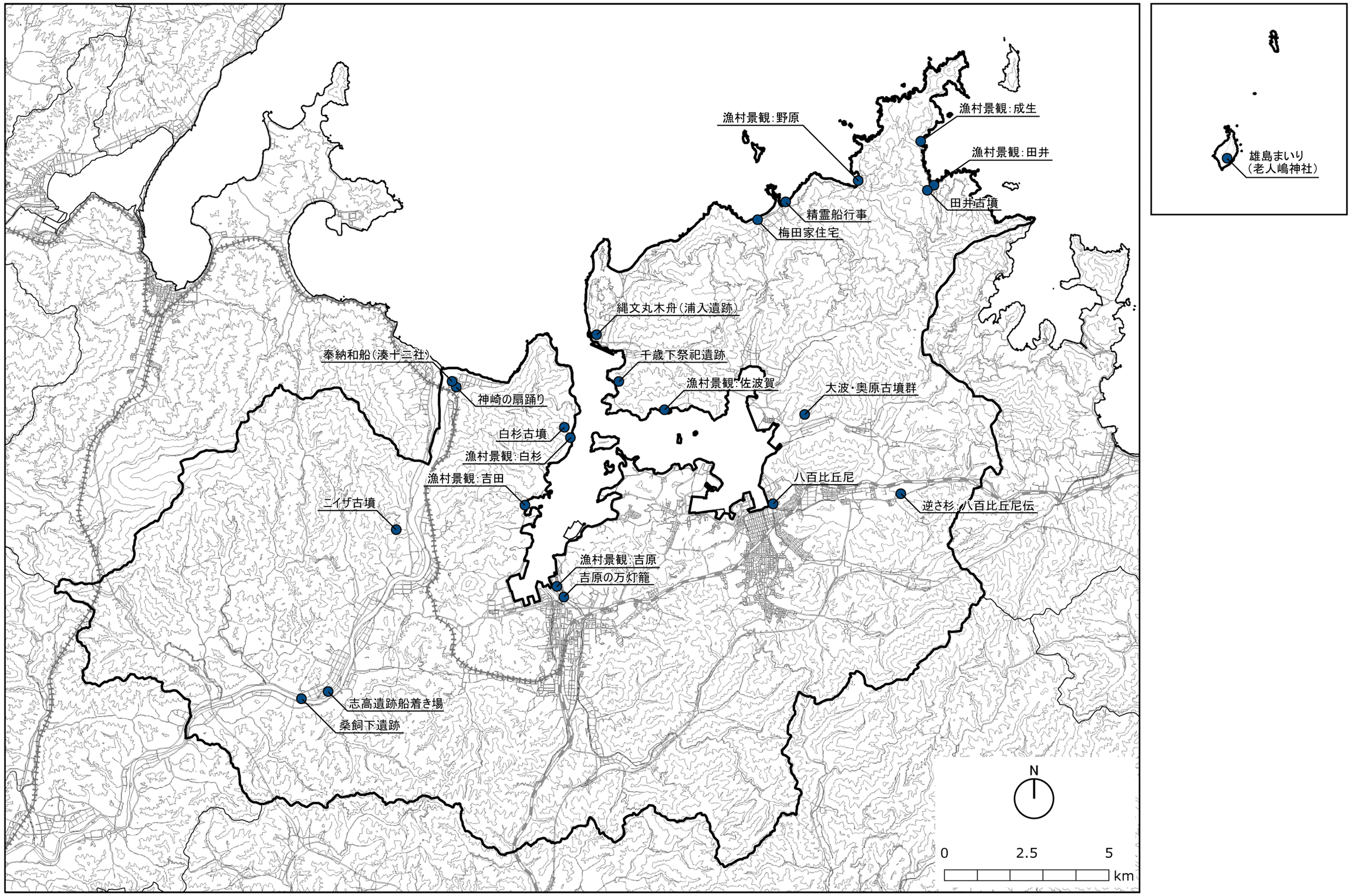

図３－11　人と海との関わりが息づく歴史文化